

NEWS RRM

[ニューズ] Regional Resource Management



令和4年度がスタートした。3月におくり出した修了生の背中を見ていた後輩たち(写真最後列)は、一気に最前列に躍り出て(押し出されて)、新入生らに対して、研究面だけではなく、但馬での新生活についても世話を焼いてくれている。人間だれしも、その場に立たされればそれなりに立ち回れるものだ。当研究科は、北海道から沖縄県まで全国から老若男女の学生が集う。初顔合わせのオリエンテーションでは緊張した面持ちの彼らが、多様な文化を有する新しいコミュニティに属し、キャンパス周辺の自然や地域の人々にも育まれながらマルチリンガルに成長していく姿に立ち会えることは、我々にとっても教員冥利に尽きる。

さて、左下の写真は修了生に送った教職員手作りのコースターである。昨年度の修了生は修士が11名、博士が1名であった。コースターの表には12名の研究テーマがイラストになつており、これは昨年に引き続き、彼らの先輩の力作である。コウノトリやサギ、カエル、チョウからユズ、城、カルデラ、港、修験道！まで、我々が研究材料とする地域資源の多様さを窺い知っていただければ幸いである。当研究科の研究ポリシーとしては、「地域資源の保全と活用」であることから、各研究材料について基盤学問からの解釈にはとどまらず、その結果を踏まえて具体的なマネジメント手法について

9年目の春

教授 佐川 志朗

で提言することを目指しているが、まだ道半ばといったところであろうか。裏面には教員からのメッセージが書き込んであり、送別会の際には各教員からこれに対する熱くかつユーモラスな説明があった。私が送った言葉は、あのシェイクスピアのマクベスにおける名言、「明けぬ夜はない」である。見通しがたないコロナ禍に併せ、ロシア、ウクライナ情勢も加わり世界は混沌としている。こんな世の中で将来に希望が持てるのだろうかと考え若者もいるであろう。かくいう私も時にはそう思う。しかし自然の摂理に照らし合わせても、方丈記しかり、「終わらないものはない」のである。

我々はここ但馬の地で生きていく。先人達が築いてくれた長い歴史の階段の上に立てていることに感謝して。



教職員手作りのコースター

Information

夏のオープンキャンパス2022

Information 01

地域資源マネジメント研究科の一般公開「夏のオープンキャンパス」を2022年7月10日(日)に開催します。オープンキャンパスでは研究科や入学試験の概要紹介、施設紹介などを行います。今回は新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大防止のため、対面とwebサービス(Zoom)を併用してオープンキャンパスを開催します。当研究科に興味のある方、受験を検討されている方のご参加をお待ちしております。

日時	2022年7月10日(日)13:45~16:15
場所	兵庫県立大学豊岡ジオ・コウノトリキャンパス(豊岡市祥雲寺128番地)
参加方法	7月5日(火)までにメールかFaxにて参加申し込みを行ってください。オンライン参加希望者には、ZoomアクセスIDを通知し、研究科資料を郵送します。
内容	(1)研究科、カリキュラム、入学試験についての説明 (2)研究施設や研究フィールドの見学、在学生による研究紹介 (3)個別相談 など

●2022年度オープンキャンパスの予定

夏のオープンキャンパス	秋のオープンキャンパス	冬のオープンキャンパス
7月10日(日)	10月30日(日)	12月25日(日)
個別面談 7月5日(火)~7月10日(日)	個別面談 10月25日(火)~10月30日(日)	個別面談 12月20日(火)~12月25日(日)

※新型コロナウイルスへの対応により今後の予定が変更になる場合があります。変更などの情報は地域資源マネジメント研究科のホームページに逐次更新していきますので、参加希望の方はご確認をよろしくお願いいたします。

[お問い合わせ] 各催しの詳細はウェブサイトをご覧ください。あるいはメール、電話にてお気軽にお問い合わせください。

入試情報

(博士前期課程A 日程・博士後期課程第1回) Information 02

博士前期課程A日程入試(全日程合わせて定員12名)、博士後期課程第1回入試(全日程を合わせて定員2名)を2022年8月27日(土)に実施します。試験内容は専門試験(小論文)と口述試験です。会場は豊岡ジオ・コウノトリキャンパス(豊岡会場)と神戸商科キャンパス(神戸会場)から選ぶことができます。

日時	2022年8月27日(土)
願書受付	2022年7月26日(火)~8月10日(水)

※事前に受験資格審査が必要な場合は、2022年7月9日(土)~7月22日(金)に審査書類をご提出ください。

地域資源マネジメント研究科 紀要刊行のご案内

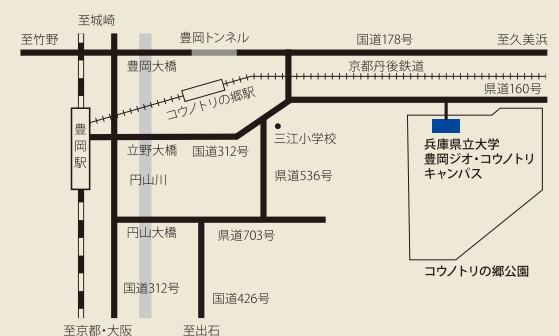
Information 03

2022年3月に、地域資源マネジメント研究科に関わる研究をまとめた紀要「地域資源マネジメント研究」を刊行しました。最新の研究成果を、インターネットを通じて無料で閲覧することができます。ご興味のある方は「兵庫県立大学学術レポジトリ」でウェブ検索をし、「地域資源マネジメント研究」のページを探していただくか、右のQRコードを参照ください。



兵庫県立大学大学院 地域資源マネジメント研究科 RRM

〒668-0814 豊岡市祥雲寺128
(兵庫県立コウノトリの郷公園内)
兵庫県立大学豊岡ジオ・コウノトリキャンパス
Tel. 0796-34-6079 Fax. 0796-22-5200
E-Mail: rrm@ofc.u-hyogo.ac.jp
<http://www.u-hyogo.ac.jp/rrm/>



【写真提供】
佐川 志朗：集合写真、教職員手作りのコースター
末本 貴大：カジカガエルの抱接中ペア
石井三重子：季節風を遮る島に囲まれている竹野漁港(2021年12月2日)
大石 礼：地元・企業だけでなく様々な主体が関わるユズ園(2020年11月17日)

TOYOOKA GEO & KOUNOTORI CAMPUS

地域資源マネジメント研究科

2021年度 博士前期課程 修了生の研究紹介



地域資源マネジメント研究科は2014年度の開設以降、
合計61名の博士前期課程修了者を送り出しています。
本号では2021年度の修士論文について紹介します。

RRM Introduction

GEO

GEO Study field [ジオ研究領域]

京丹後地域の漁港分布と 地形・地質条件の関係

Ishii Mieko
石井 三重子 (所属：元大学院生)

変化に富んだ海岸線の岬や島に囲まれた場所に漁港がある、そんな風景は日本ではなじみがあります。台風や季節風が厳しい島国ならではの特徴です。山陰海岸ジオパークではリアス海岸の入り江が天然の港として利用されてきたとの研究がありますが、海岸段丘が発達する京丹後地域はリアス海岸地形が残っていない場所がある、どんな地形を漁港に利用しているのかとの疑問が本研究の動機です。調査地は指定漁港13港です。調査内容は①地形の特徴②その地形がどのようにしてつくられたのかです。現地で地質を調べ地図上に記録し、ロックハンマーで岩石や地層の硬さを調べ、岬や岩礁付近の浜の礫の種類を調べました。



写真：季節風を遮る島に囲まれている竹野漁港(2021年12月2日)

京丹後地域の漁港に使われている場所は①リアス海岸地形の入り江(6港)②リアス海岸地形がなく岬・島・岩礁に囲まれた入り江(7港)③リアス海岸と岬・島・岩礁の複合タイプ(3港)に分類できます。②と③には1港を除き硬さの違う岩石が存在しており、岬・島・岩礁は硬い岩石でできていました。京丹後沿岸は日本海形成に関わる火成岩や堆積岩が存在し地球レベルの大地の変動が造りだした地形地質が漁港の形成に関係していること、人々は地域の自然資源を巧みに利用し生活してきたことが窺えます。

ECO

ECO Study field [エコ研究領域]

カジカガエルのフェノロジーと 生息河道特性

Suemoto Takahito
末本 貴大 (所属：研究生)

カジカガエルというカエルをご存知でしょうか。本種は灰褐色が目立たない体色のカエルですが、美しい声で鳴き、古くから万葉集などの和歌に詠まれてきました。本種は河川の中上流域で繁殖するため、成体は指に吸盤を持ち、オタマジャクシは吸着する大きな口を持つなど、溪流環境に適応した特徴を持っています。

本種は兵庫県レッドリストで準絶滅危惧種に指定され、河川改修や水質汚濁の影響で減少していますが、保全研究は乏しいのが現状です。そこで私は本種の鳴き声と、河川の蛇行との関係性に着目した研究を行うことにしました。魚類や底生生物は、直線化された河川より蛇行した河川で多様性が高いからです。



写真：カジカガエルの抱接中ペア

調査では、河川の調査区間を蛇行した回数で区別し、各地点にボイスレコーダーを設置し、鳴き声の多寡を分析しました。その結果、本種は蛇行が大きい河川よりも、直線の河川でよく鳴いていることが明らかになりました。本種のオスは水面から出た石の上で鳴き、直線の河川ではそうした石が出現しやすいためと考えられます。本種を含めた溪流環境の生物多様性の保全には、蛇行した区間だけでなく、直線の区間もバランスよく存在することが必要と考えられます。

SOCIO

SOCIO Study field [ソシオ研究領域]

農山村における自然資源の 過少利用をめぐるコミュニティ形成的協働

Oishi Rai
大石 礼 (所属：養父市役所)

近年、地方自治体やNPO、営利企業などが手を組み、社会的課題の改善を目指して共に事業を行う活動、いわゆる「協働」が注目されています。このような協働は、担い手不足により自然資源の過少利用問題に直面している農山村にとって、その状況の改善に資する可能性をもつといえます。しかしながら、営利主体と非営利主体という異なるセクターに属する主体の協働には、営利性と非営利性という相反する性質が内包されており、その性質によって協働関係が破綻する恐れがあります。

私の調査地である兵庫県養父市筏区では、地域住民組織、企業、行政の三者によって柚子の栽培が行われていました。本研究において、私は何度も地域へと足を運びこの協働がなぜ成立しているのか、その根幹となるどのような思いでこの柚子栽培を行っているのかの聞き取り調査を行いました。



写真：地元・企業だけでなく様々な主体が関わるユズ園(2020年11月17日)

調査を行っていくと、この柚子園は前述の三者だけが利用するだけでなく、地域の小中学校生や地元の企業などの他の様々な主体が営利・非営利問わず関わるコミュニティ形成的協働が行われていることが判明しました。そして、コミュニティ形成的協働は、集落機能の低下に伴い自然資源の過少利用問題を抱える農山村にとって、その問題への対処の方向性を考える際のヒントになるのではないのでしょうか。